

はそろそろ止まることがわかる。しかし、シャワーだけで四十分間はとて長くて、かかりっぱなしでいるわけにはゆかず、一時傍らにある木製腰掛けにかけて休みながら一緒に入浴したロシア人達の入浴状況を興味深く眺めていた。シャワーが止まると、次の室で消毒済み衣類を、はじめにもらった刻印入りメダルと交換で受領し、衣服を整えたところで次の室に入る。そこは休憩室で、ジュース等も売っており、長いシャワーでほてった体を休めることができた。一般市民には月一回くらい入浴券が出ているとも聞いたが、なかなか合理的な流れ作業システムの浴場であると思っただ。入浴後は突撃中隊のときや帰還準備中に不要品を市民に売って作った小遣いの持ち合わせもあったので、駅前付近を見物したり、駅の売店でアイスクリームを買って食べたり、二年前の往路とは地獄と極楽の違いの旅だったことを覚えている。

運が良かったこと二つ

石川県 塩 由 造

私は、戦前、鮮満大陸との連絡口の一つであった能登の七尾港の隣町、田鶴浜で生まれ、家業（神職）を継ぐべき長男でもなかったため、上京して武蔵野高等無線学校に学んだ。

昭和十（一九三五）年に卒業して渡満、延吉にあつた間島省商工部に就職。無線通信の業務に就いたが、建国早々で治安は安定せず、ソ連領とも近いので反日的な共産匪の暗躍なども絶えず、関東軍や警察関係の秘密通信を扱うことも多かった。

大東亜戦争が勃発して省庁の日系役人は次々に召集されて仕事も激増、私も何度か召集されたものの、特殊任務ということで解除になっていた。二十年の六月に来た最後の「赤紙」で入隊したところはハルビンの近郊、阿城の第四二〇榴弾砲兵団で、長官は砲兵少将

の大部隊であった。ドラム缶をつないだような太い砲身、魚雷のような砲弾に肝をつぶしたが、無線通信の特技を持っていたので、早速暗号や無線の教官を命ぜられ、小柄で非力な身に激烈な砲兵教育を受けずに済んだのは幸いであった。

終戦の時、部隊はソ満国境、琿春の八道河で陣地構築中であつたが、ソ連軍戦車はそれを百も承知でいきなり背後から侵攻してきた。指揮班にいた私は砲の始末がどうなつたかも憶えておらず、アレヨアレヨという間に降伏。歩いて国境を越えてソ領に入り、十一月頃貨車に積まれて北上、更に西に向かいイズベストコーワヤという町で下車した。後で聞いたことだが、ここから北へ支線が延びて、クレドール、テルマ、ウルガルを経てバム鉄道（第二シベリア鉄道）の建設に、万余の日本将兵が従事させられることになる。

鉄道路盤工事に必要な砂利降ろしが主な仕事であつたが、驚いたことには工事用のトラックやクレーン等とはもとより、三度三度の食糧までUSA製であつたことだつた。

収容所は丸太をふんだんに使つたログハウスで、ペーチカも設けられていて、厳寒期の辛さが私には耐えられなかつたという印象が薄かつたのは、次のような幸運に恵まれたせいもある。

入所して間もなく、炊事要員の募集があつたとき真っ先に手を挙げて、翌日から炊事に入つたことである。抑留生活の最大辛苦の一つ、「飢え」から救われたこと。これは何にもまして天与の至福と思われ、抑留時代の暗い印象から救われた思いがするのである。

シベリア 想い出の一部

岐阜県 加藤 豊

悲惨な第二次大戦開戦直後の昭和十七年一月十日、中部第八部隊へ現役入隊し、満州第五六部隊、通称名第一三国境守備隊へ転進した。当部隊は、黒河街よりアムール河上流約二十キロメートル付近の流深部を国境と定め、岡大佐統率の下に歩兵四個中隊「江上中